様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４９４

研究課題名（和文）印欧語における非人称受動表現の比較研究

研究課題名（英文）Research on impersonal passive in Indo-European

研究代表者
石井　正人（Ishii, Masato）

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：５０１７６１４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,800,000円、（間接経費）　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：この研究のテーマは、インドヨーロッパ語における非人称受動表現である。一般に受動態は、対格目的語を持つ動詞（他動詞）の能動態からのみ形成可能であるが、サンスクリット語・ラテン語・現代ドイツ語等では自動詞の能動態から受動態形成が可能で、それが非人称受動という主格主語のない特殊な形になる。伝統的な文法記述で説明できないこの現象の生成･発展・衰退過程を明らかにし、この成果を「サンスクリット語文法」と「歴史的言語コミュニケーション論」の教科書という形で発表した。

研究成果の概要（英文）：The theme of this research project is the impersonal passive in Indo-European languages. Passive sentences can be generally formed exclusively from sentences of verbs with accusative object (transitive verbs), but in some languages as Sanskrit, latin or modern German they can be formed also from sentences with intransitive verbs and into a special sentence type without nominative subject as impersonal passive. This research explained the process of formation, development and decline of this grammatical phenomen of impersonal passieve that the traditional grammar could not make clear and published the results as "Elementary Sanskrit Grammar" and "Introduction to the historical communication theory".

研究分野：人文学

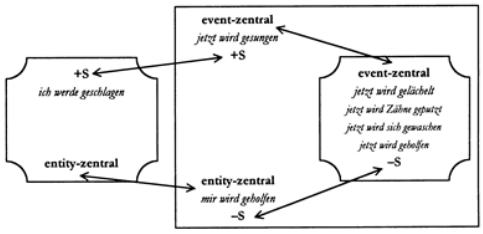
科研費の分科・細目：言語学

キーワード：歴史言語学　比較言語学　西洋古典学　ラテン語学　ドイツ語学　言語学　日本文化の翻訳発信

１．研究開始当初の背景

P.M.Vogel がドイツ語史における非人称受動表現を広く研究した労作 “Das unpersönliche Passiv”（2007）において結論的に示したシェーマは以下の図の通りであった。

主語の有無（+S/-S）と動詞行為を実体で見るか生起で見るかの別(entity/event)を導入したこの分析方法は、伝統的な研究方法をまっすぐに受け継いだ丁寧かつ穏当なものでありながら、非人称受動表現が実は純粋な人称受動表現よりも多様な現象をカヴァーしており、この多様性に向き合わなかったことこそが従




Unpersönliches Passiv

来の研究が伸び悩む原因であったことを鋭くうきぼりにするものであった。純粋な人称受動表現こそが特殊な状態なのだということはもっと強調されて良い。

私は「現代ドイツ語における非能動態(Mediopassiv）」（1993）から、”Das unpersönliche Passiv des Lateins in Caesars *de bello gallico*” (2010) まで断続的にこのテーマに取り組んできた。

その結果、現段階までに明らかになったことは、例えばラテン語の非人称受動表現は下図のように：

（１）　四つの発達段階を背景にした四重の意味機能を含んでいること、そして

（２）　高度な文体論的技術を実現するための操作性に行き着いている、ということである。

この操作性をどう発展させたかに、各言語の特殊性が表れてくるのであろう。この発見を更に詳しく発展させたいというのが、本研究を計画した動機である。

２．研究の目的

本研究は、印欧語における非人称受動表現を、特にそれが発達しているドイツ語とラテン語を中心に、適宜サンスクリット語と古代ギリシャ語を参照しつつ比較考察し、その本質的構造と展開諸形態を明らかにしようとするものである。一般に diathese の問題は、aspect や pronomen の問題と並んで伝統的文法記述が弱点を示すところであるが、近年の類型学的視点の導入も期待したほどの成果を生まず、研究に手詰まり感が否めない。本研究ではドイツ語やラテン語の比較的豊富な用例を手がかりに、統語意味論的分類や表現機能に立ち入った分析を行い、非人称受動表現の研究に新たな視点を導入しようとする試みである。

非人称受動表現の発達段階とそれに基づく重層性という従来にない観点を導入し詳細に分析結果を出すことで、

（１）Diathese の問題そのものや、

（２）名詞句の格機能そのものに新たな研究可能性が見出せ、

（３）さらには文体論的操作性に注目することで、広い意味での文法研究と、文体論・表現論・コミュニケーション論との間に、新たな生産的で有機的な関係が構築されることを促進できるであろう。

これはまさに、伝統的な文法記述の枠を乗り越える、言語科学の今日的課題に正面から答えることになる。

３．研究の方法

（１）　Vogel の研究成果を手がかりに、ドイツ語史における非人称受動表現の分析を行う。

（２）　Cicero を中心に古典ラテン語における非人称受動表現の考察対象を広げ、理論的枠組みの確立を試みる。

すでに古典的なドイツ語文法書において、「対格(4 格)目的語構文」以外の、「純粋自動詞構文」・「属格(2 格)目的語構文」・「与格(3 格)目的語構文」・「前置詞格目的語構文」の受動態転換が総括的に記述されることは再検討するに値する。ここでは「werden 受動」による、純粋な人称受動表現への転換が対格(4 格)目的語構文にしか許されないという文法的制約が撤廃されていることになる。だがドイツ語はこの自由な操作性を駆使して文体論的技術を発達させず、非人称受動表現はあくまで例外的で希な使用にとどまり、「bekommen 受動」を構築したりする。しかしラテン語は非人称受動表現の自由な操作性を十全に発達させた形跡がある。このような観点からドイツ語とラテン語の非人称受動表現を比較検討する。

（３）　ラテン語・ドイツ語における非人称受動表現の分析を行いながら、

（４）　主に説話文学におけるサンスクリット語と

（５）　古代ギリシャ語における非人称受動表現の分析を行う。

ギリシャ語では、-teon 型動形容詞表現にしか非認証受動表現は現れないようだが、受動態転換に於ける対格制約は撤廃されている。他方でサンスクリット語における過剰なまでの受動態の愛用と、豊富な非人称受動表現の用

例は、表現技術の発達と言うよりは操作性の肥大爛熟の観を呈しており、非人称受動表現の発達に関して、ラテン語とドイツ語からだけでは見えない、また違った実例を教えてくれるであろう。

（６）印欧語の非人称受動表現の機能と構造を総括する理論を構築する。

古代ギリシャ語の場合には先に挙げた例のごとく、属格目的語構文でも与格目的語構文でも、格構造を破壊して対格目的語構文と同様に純粋な人称受動表現への転換が可能になっている。これは新高ドイツ語における「対格(4 格)目的語構文の拡大―属格(2 格)目的語構文の縮退」と本質を同じくする傾向だと思われるが、ドイツ語はそれでも非人称受動表現の大きな可能性を保持したところが大きな特殊性である。この点のドイツ語のアルカイックな堅固さは驚くべきもので、英語の SVOO 構文における受動態変換の二重の可能性を、ドイツ語はついに認めないままである。

従来のような、根本的・根源的な構造や機能を突き詰めるという研究方法ではなく、発達と展開の豊富さから可能性の広がりとして特定の現象の本質を解明しようとするのが、本研究の最大の眼目である。この研究成果を公表する。

４．研究成果

すでに Helbig/Buscha のような古典的なドイツ語文法書においてすら、「対格(4 格)目的語構文」以外の、「純粋自動詞構文」・「属格(2 格)目的語構文」・「与格(3 格)目的語構文」・「前置詞格目的語構文」の受動態転換が総括的に取り上げられていたことは再検討するに値する

SV: Die Zuschauer klatschten > Es wurde [von den Zuschauern] geklatscht.
$SVO^2$: Der Lehrer gedachte des Toten. > Des Toten wurde [von dem Lehrer] gedacht.
$SVO^3$: Der Lehrer hilft dem Schüler. > Dem Schüler wird [von dem Lehrer] geholfen.
$SVO^4$: Er hat mich geschlagen. > Ich bin [von ihm] geschlagen worden.
$SVO^P$: Der Lehrer sorgt für Ordnung. > Für Ordnung wird [von dem Lehrer] gesorgt.

ここではいわゆる「werden 受動」による、純粋な人称受動表現への転換が対格(4 格)目的語構文にしか許されないという文法的制約が完全に撤廃されていることになる。だがドイツ語はこの自由な操作性を駆使して文体論的技術を発達させず、非人称受動表現はあくまで例外的で希な使用にとどまり、「bekommen 受動」を構築したりする。

しかしラテン語は非人称受動表現の自由な操作性を十全に発達させた形跡がある。例えば cognoscere「知る」は、対格目的語構文を取ることも、de 前置詞目的語構文を取ることもでき、しかもその用例の分布はほぼ均等なので、ab eo de periculis Ciceronis legionisque cognoscitur. 「(カエサルは) その者から司令官代理キケロ（有名なキケロの弟）と彼に任せた軍団の危機を知る」という『ガリア戦記』第 V 巻の一文は（この ab eo は例外的に文脈上動作主ではない）:

$SVO^4$ active: ab eo pericula Ciceronis legionisque cognoscit.
$SVO^4$ passive: ab eo pericula Ciceronis legionisque cognosciuntur.
$SVO^P$ active: ab eo de periculis Ciceronis legionisque cognoscit.
$SVO^P$ passive: ab eo de periculis Ciceronis legionisque cognoscitur. (original)

の四つの可能性の中から特に選択された非人称受動表現なのだと判断することができる。恐らく「受動」であることと「de 前置詞目的語構文」であることが表現上必要だったのであろう（知らせが寝耳に水だったことと、部分的であったことの強調)。

非人称受動表現こそ従来の伝統的文法記述のほころびを明らかにするものであり、ここを追及することで「態」の本質から、更に大きなヨーロッパ言語の文法構造の深層が明らかになった。

伝統的文法記述においては「態」は能動態と受動態を主要な対立として論じられるが、実際には元来能動態から中動態が発生し、「態」は元々能動態と中動態の対立において捉えられるべきものであった。主に中動態から受動態が発生・発達し、中動態が形態的に衰退する中で、能動態と受動態の対立が「態」の中心点問題と認識されるようになったが、中動態はの表現要求、表現上の必要性は連綿と水面下において生き続けており、多くは再帰表現や英語に特徴的な中間動詞など、新たな文法範疇を獲得して生き延びた。しかし非人称受動表現だけは伝統的文法記述における鬼っ子、「態」の異物として生き残り続けたのは、ここにこそ「態」の本質が現れているからだった。

「態」はもともと、「主語」が動詞の表す動作・状態に対して、能動的か否かを表す文法形式であった。その後再帰表現になったり、普遍的真実を表したり、「強調」を表したりすることになるのは、この非能動性から派生した意味用法で、「主語」が動詞の表す動作・状態に「好むと好まざるとに係わらず、必然的に巻き込まれ、関わり合う」ことを表す中動態の本義から発展したものである。

従って非人称受動表現からこうして明らかになるヨーロッパ語の深層構造は、「対格言語」と「能格言語」の対立をさえ越えていくものであり、根本的に新たな文法を展望させるものであった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計　8 件）

① 石井正人、梶田幸栄先生を送る、『人文研究』、査読なし、43 巻、2014、pp.17-23
② 石井正人、村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、『民主文学』、査読有り、578 号、2013、pp.120-127
③ 石井正人、ドイツにおける戦争責任の追及と文学、『民主文学』、査読有り、2012 年 12 月号、pp.70-80
④ 石井正人、Es wird gegessen, was auf den Tisch kommt!（日本語）、『光野正幸教授還暦記念論文集』、査読有り、2012、pp.15-29
⑤ 石井正人、読書する学生たち―2011 年 11 月のアンケート調査から―、『民主文学』、査読有り、2011 年 11 月号、pp.120-130
⑥ 石井正人、クリストフォロスの変容―ショーロホフ『人間の運命』と私たち―、『民主文学』、査読有り、2011 年 9 月号、70-80
⑦ 石井正人、シベリア抑留と「ラテン語の手紙」―井上ひさしの『一週間』について―、『民主文学』、査読有り、2011 年 6 月号、pp.94-97
⑧ 石井正人、ラテン語の非人称受動表現について、Studia Classica、査読有り、第 2 巻、2011、pp.65-96

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　2　件）

① 石井正人、サンスクリット語入門、出版社なし、2013、89
② 石井正人、言語コミュニケーション論の基礎　言語・文化・コミュニケーション、出版社なし、2013、187

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
石井　正人（ISHII, Masato）
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：50176145

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

①